

湿地性カラーの水管理法が年内採花に及ぼす影響

湿地性カラーの掛け流しの水深を 10 c m 程度に深くすると、ほ場全体の水温が均一化し、採花開始時期は前進し、切り花長も長くなる。

農業研究センター農産園芸研究所花き研究室 (担当者: 工藤陽史)

研究のねらい

熊本県は湧水を活用して栽培する湿地性カラーの全国有数の産地であるが、疫病の発生により病気に弱い早生品種から病気に強い晩生品種への転換が進み、需要期の年内生産量が減少している。その対策として隔離床栽培が導入されつつあるが、年内収量は増加していない。そこで、水の掛け流しの水深が年内採花に及ぼす影響を検討する。

研究の成果

- 1 葉の展開速度は、水の掛け流しの水深による差はない。草丈は、水深が深い方が高く推移する (データ略)。
- 2 採花開始時期は、掛け流しの水深が深い方が早く、切り花長も長い (図 1)。
- 3 水温は、掛け流しの水深が深い方が変動は小さく、水面に発泡スチロール片を浮かべてマルチすると変動はさらに小さく、水口と水尻の水温の差も小さい (図 2、図 3)。

普及上の留意点

- 1 発泡スチロール片でのマルチは、日射量の多い時期は、発泡スチロールからの反射光が強いため寒冷紗などを被覆して遮光することが望ましい。



発泡スチロールマルチ区 対照区  
湿地性カラーの半地中型隔離栽培

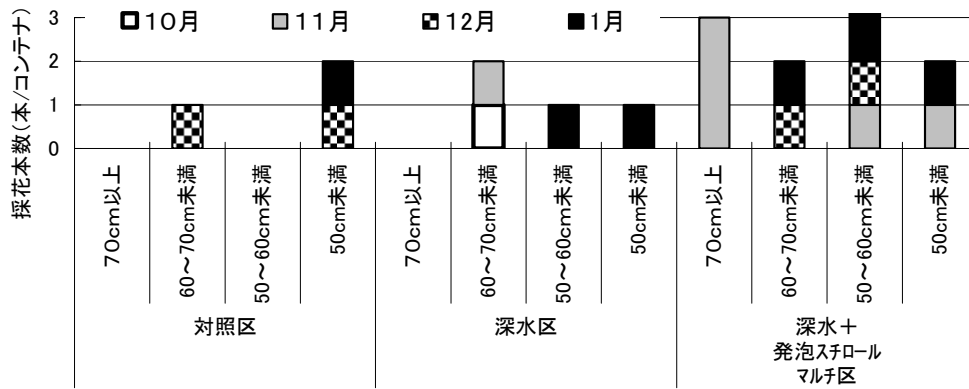


図1 切り花長および旬ごとの採花本数（品種‘グリーンカー’）

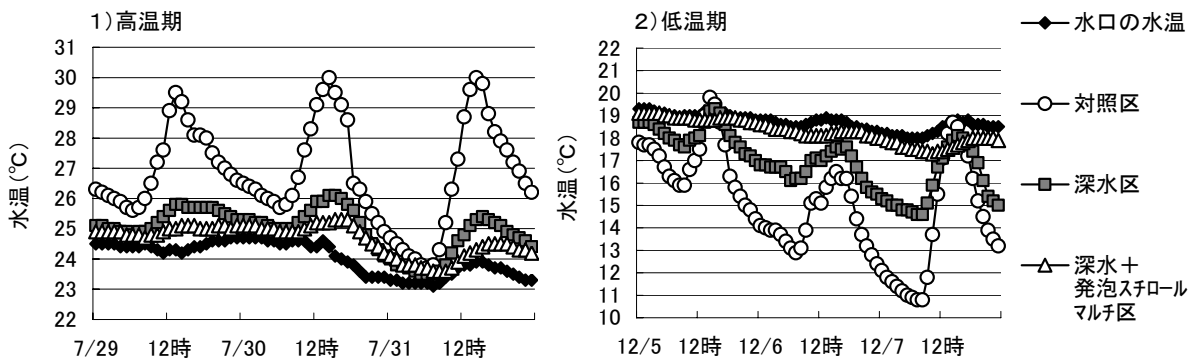


図2 高温期および低温期の水温の推移

※各試験区の水温は、水口から10m離れた場所の地表面上1.5cmの位置の測定値

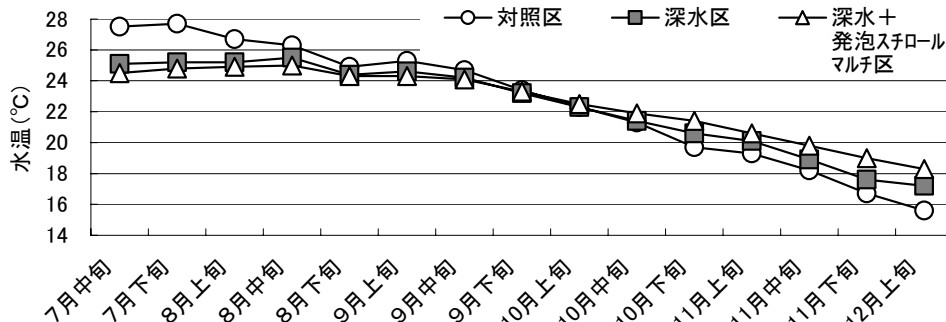


図3 旬ごとの平均水温推移

※各試験区の水温は、水口から10m離れた場所の地表面上1.5cmの位置の測定値

注) 試験概要

1. 試験開始 2008年7月10日
2. 栽培は、防根シートを敷き、厚層多腐植質黒ボク土を深さ15cm入れて充填した球根コンテナ（L60cm × W40cm × 20cm）に4株を2005年に定植した3年株を用いた。コンテナは、地中に掘った溝にビニルシートを敷いた半地中型の隔離床に沈めて行った。
3. 掛け流しの水は、各隔離床レーンに4.2L/分を終日流した。
4. ハウス環境は、防風ネット（遮光率30%）を試験開始～11/4、寒冷紗（遮光率40%）を7/25～10/22、ビニルを11/5～、内張トンネルを12/8～にそれぞれ被覆した。
5. 試験区  
 対照区：掛け流しの水深3cm、 深水区：掛け流しの水深10cm  
 深水+発泡スチロールマルチ区：  
 掛け流しの水深10cmの水面に発泡スチロール片（1.5cm × 1.5cm程度）を浮かべて水面をマルチした